

明珠

龍泉院
參禅会会報

従容録に学ぶ (三二)

第九則 南泉斬猫

〔示衆〕

衆に示して云く、滄海を踢翻せば大地は塵のごとくに飛び、白雲を喝散らせば虚空は粉みじんに碎かる。巖に正令を行ずるも、猶お是れ半提なれば、大用を全て彰わすには、如何んが施設せん。

〔本則〕

挙す。南泉、一日東西の両堂、猫児につき争う〔人、平らかならば語らず、水、平らかならば流れず〕。南泉、見るや遂で提起けて云く、道い得れば即ち斬らじ〔誰か敢えて鋒に当らん〕。衆、対えなし〔直い雨の頭に淋ぐを待つとも〕。泉、猫児を斬却て兩段と為す〔抽いたる刀は鞘に入らず〕。泉、復た前話を挙して趙州に問う〔再来は半文にも直せず〕。州、便ち草鞋を脱ぎ頭上に載せて出ず〔好与にせよ、一刀兩段に〕。泉云く、子若し在らば、恰も猫児を救い得てんに〔心斜めなれば、口の喙みに覚かす〕。

前回到り引きつづき、南泉さんの則です。それも、あまりにも有名な「南泉斬猫」という問題の一則。「碧巖録」や「無門関」などの公案集にも収められています。ただ、この一則は南泉の言動がたしかに主役ではありますが、ワキ役の趙州さんが重要な立場を占めています。

趙州（七七八～八九七）は南泉の法嗣で従説が名前。一〇才の大長寿者であつて、本誌ではこれまでに第一八則「趙州狗子」（第七号）と第三九則「趙州洗鉢」（第一五号）の二則を学んできました。初出の第一八則のときに、伝記はくわしく紹介したので再説しませんが、唐代では数ある禅匠の中の禅匠といつてよいスーパーマスターです。

まず、この則の根本主旨を万松さんが「示衆」で示しています。例によつて意識しましょう。

「大海をけ倒せば大地もふつとび、白雲を吹き散らせば大空もコナゴナ。たとえていえば、これが仏祖たちの力量によるはたらき。だが、仏法を厳格に行ずるには、それでもまだ半分。残りはどう教へ示したものかな。」

およそこんな意味です。いうまでもなく、南泉の殺活自在の力量はまだ半分で、残りは趙州があざやかに示したことを、暗に述べているのです。そして、眼目の「本則」。

「ある日、南泉の道場では、東西の僧堂にいる雲水たち



がネコについて論争した。それを見た南泉、やにわにネコを引っさげて云う。『お前たちが今究極の真理を言えたら、斬らずにおこう』。だれも言葉が出ない。そこで南泉はネコを一刀両断にした。あとで南泉はこれを趙州に話す。趙州はだまってワラジを脱いで頭にのせ、スタスタと出て行った。南泉『あのとき彼がいてくれたら、ちゃんとなコを救えたのに』と。

表面の意味はこんなところ。それにしても、南泉はなぜこんな殺生をしたのでしょうか。

唐代の禪道場には、ネズミ捕りにネコがいたようです。人が集団生活するところには食糧の蓄えがあり、それこそネズミのねらいどころだからです。南泉道場で雲水たちがネコについて言い争ったのは、仏性の有無や寿命の長短などが。「猫兒」の「兒」は助辞ですから、子ネコではありません。

とまれ、南泉は争いのタネであるネコを引っさげて、雲水たちに真の言動を迫った。かれらの分別による論争のシガラミを絶ち切るうと。禪匠たちは、よく作務・食事・行脚などの日常生活の上で雲水に仏法を説き示し、真理を会得させています。南泉の場合、きわめて日常的な場でのネコ談議を、

いきなり雲水の修証問題にもっていった。生きたネコを絶対絶命の組上にのせ、彼等に真実の一句をピタリと言えと。ネコの生死は雲水たち自身の生死だと、ギリギリの極限状態に追い込んだのです。彼等は息をのみ、葛藤切断の言動が何もとれなかった。そこで可哀そうにネコは斬られてしまった。

南泉自身、のっぴきならんことをしたと悔いたのでしよう。ふだんから一日置いていた趙州が帰ってきたので、事の顛末を話した。趙州がワラジを頭にのせて出て行ったのは一種の痴戯で、師匠あなたはまだ何という大人げないことをしてかしたのです、というたしなめの動作。それに対する南泉の悔語は、今さらのつけ足しでした。さて、この公案は南泉の殺生というすさまじい犯戒の行動を、どうとるかが眼目。古来多くの論評やコメントがなされています。

まず前述の『碧巖録』では、南泉が分別の葛藤切断にみごとなたらきを示したと力量をほめ、同時に趙州の心境を絶讃しています。いつほう『無門関』では、趙州が現場にいたらば南泉の刀を奪いとり、南泉に命をいせさせたはずだ、と間接的に南泉の行為を批判しています。本『従容録』の万松さん

南泉山からほど近い長江の流れ



認めて南泉とネコの両者を救いつつ、行為そのものは否定するといふ深い配慮をしています。ひるがえって、私たち仏教徒は殺生についてどう受けとめるべきでしょうか。自らの問題として。それは、ただ殺生しないという行為を守るだけではなく、進んで今ここに生かされている命をより良く生かすのが持戒の根本精神です。これが、無意識のうちに慈悲や精進につながる道であります。

私は五〇年以上、畑を一反歩ほど耕作しています。すると、知らず知らず無数の虫たちを殺害している。雑草は常に駆除。つまり、特定の植物性食品を収穫するという美名のもとに、無数の動植物を犠牲にしているわけです。その収穫物もまた食べる。こうみると、肉食者として間接的な殺生者であります。これをまず自覚すること。私が朝食だけながら菜食に徹しているのは、お恥しいことながら、せめてもの動植物殺生に対するさやかなサンゲと自覚によるいのち精進の気持であります。道元様は、「この生死は仏のおんいのち」と教えられました。私たちは今いただいている命を大切に、懸命に生きようではありませんか。

〔一泊参禅会〕

六月八・九日

第一七回一泊参禅会は、天徳山龍泉院に於て実施、一日参加の二名を含め二七名が参加しました。

昨年は大自然の中の宝慶寺、そして金沢・大乘寺での坐禅と貴重な体験をさせて頂きましたが、今



年は二年ぶり、ホームグラウンドの一泊参禅となりました。全てが手作りの会、典座役の作って下さる食事にも温かさが、それをエネルギーにきつと充実した坐禅が出来たことと思います。

今回の提唱にて、『受食五観訓蒙』を終了、「少欲知足」、椎名老師の声が耳に残ります。

一泊参禅会に参加して

柏市 戸塚 英明

朝四時振鈴。周囲はまだ暗闇。床から起き、身繕いを済ませている間に一瞬の驟雨があり、涼やかな空気の中で一泊参禅会二日目の一炷が始まりました。

この一炷の間に夜明けを迎えることになりました。禅堂の曇りガラスの彼方が少しずつ明るくなり、徐々に夜が明けていきます。爽やかに鮮烈な印象を残した時間でした。私と坐禅の出会い、三十代半ばの頃、家族と流山七福神巡りの途中、ある曹洞宗のお寺で坐禅

会の看板を見かけたことに始まりました。以来一七年間、断続的に坐禅を続け、今では坐禅が生活の一部になりつつあります。昨年一〇月からは、毎朝三〇分の坐禅を日課にしています。起床が遅れ、三〇分が一五分になることもありましたが、ほぼ、毎日続けております。

しかし、一方でどうしても坐禅が自己流になりがちで、未だに結跏趺坐も組めず、雑念にとらわれのまま坐禅を終える事もしばしばありました。そうした時に、龍泉院参禅会のお話を伺い、今年の一月から末席に加えて頂き、改めて坐禅を見つめ直しております。

龍泉院参禅会では、初めて一日二炷の坐禅を体験致しました。ですから、今回の一泊参禅会に参加して、二日で七炷の坐禅ができるか、はなはだ心許ないものがありました。

案の定、一泊参禅会一日目の三炷から膝が痛くなり始め、二日目最後の四炷では、膝の痛みに尻の骨の痛みも加わり、足を組むこともままならず、「安樂の法門」からはほど遠い状態でした。

当初は、二三時間の間に七炷ならば、休息の時間も多いと予想したのですが、実際は実に無駄のな

い、充実したカリキュラムでした。ご老師は「まさに接心」とおっしゃっていましたが、本当に本格的な坐禅修行でした。それだけに、七炷を成し終えた時には、爽快感と満足感を味わうことができました。

また、ご老師の禅講では、面山瑞方による「五観の偈」の解説について、貴重なご講義を拝聴することができました。「少欲知足」と「最後ノ限食」は心に刻んで参ります。(少欲知足：昔支那二、子罕ト云フ人アリ、アル人玉ヲ以テ子罕ニ獻ズ、子罕ガ云ク、我レハ貧ラザルヲ寶トス、爾ハ玉ヲ寶トス、爾若シ玉ヲ我ニ與ヘバ、二人共ニ寶ヲ失フナリトテ、カヘセシト云ヘリ)(最後ノ限食ト云ハ、食シテラントシテ、今少シ喰ベケレドモ、ソレニ心ヲ付テ一口減シテ、ウケザルヲ云ナリ)

この度の龍泉院一泊参禅会では、七炷の坐禅、ご老師の禅講、薬石や作務など、貴重な経験を通じて、多くのことを得ることができました。また、朝課における五体投地の礼、坐禅の間に行われた行茶など、初めて体験できたことも多々ありました。ご老師、幹事の方、ご出席の皆様、誠にありがとうございました。

二祖慧可大師の耳(終章)

雪舟筆「慧可断臂図」雑感

松戸市 小畑 節朗

雪舟以後五百年、空前の大展覽が今春京都・東京で行われ、この「慧可断臂図」が会場入口の大壁面を飾った。九八年東博の「日本の水墨画展」以来久々の展観であり、以前には道釈画の一点としての展示であったが、今回は雪舟の代表作としての登場である。

以前に述べたとおり、洞窟で面壁端坐する達摩大師に入室を乞う慧可大師、人物を真横から把えた構図は伝梁楷筆「八高僧図卷」、戴進筆の「禪宗六代祖師図卷」と共通しており、今回の展観でも参考として「六代祖師図卷」が展示されていたことは興味深い。しかしいづれも各祖師の事跡の説明といったものであるが、雪舟の「慧可断臂図」は遥かにこれらを越えている。

私はこの画を見る度に「何故、雪舟は慧可大師の耳を輪郭しか描かなかったのか?」と思っている。衣や切り取った臂を受けている手巾は運針の跡まで描き、夜を徹して堅く立ち続けた顔には少し伸びた髭や頭髮、睫は墨の濃淡まで

描き分け微細を極めているにも拘わらず、耳は二本の線のみで顔と耳を分けていっているのみ。今、神光(慧可の前の名)の存在に気が付いた初祖が正に一言を発しようとするのに、何故、耳を傾けないのか。

禅修行を志す者であれば知らない者はいない有名な話を、雪舟は破格に描いたのである。(倣梁楷黄初平図の耳の描き方にも似る)

いわば言葉以前の消息、禪の表現の「言詮不及、意路不到」の処を表現したのではなからうか。

言語が及ばない世界、人間界の意路が通用しない処、有無・生死の二つに分かれる以前の消息とも言うのか、そこには音も絶えている。

断臂の後に達摩大師の言った言葉「伝燈録」は次の如くに記す。「諸佛最初に道を求めしとき法の為に形を忘しき。汝、今臂を吾が前に断つ。求むることまた可なるものあり。師、遂に因つて与に名を易えて慧可といわしむ。」
神光の名を慧可に替えさせた

言うのである。先年高山登封でこの條を椎名老師にご提唱いただいた時、慧可の可は「亦可在」の可、「また可なるものあり」より来るものであるとの御教示を頂いた。

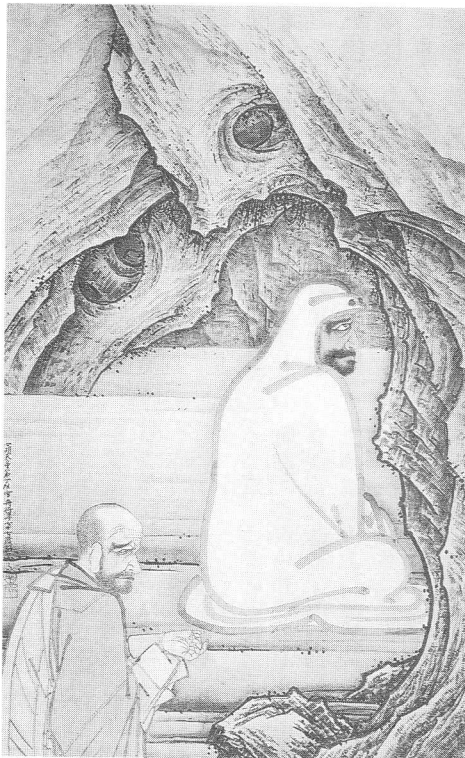
耳を描かなかったのは、神光が慧可になった後を描いたからに外ならない。神光であれば聞かねばならぬ。慧可になったからには初祖の言葉はもう「言詮不及」の場所でも聴いている。初祖はもう一語も発しない。全て発し終っているのだ。

禅機図に賛が多く見られる。しかし賛(言葉)が画を規制し、画は賛の説明になってしまふ場合もある。言葉を「音」と読み替える」と耳が目、「心眼」を晦ましてしま

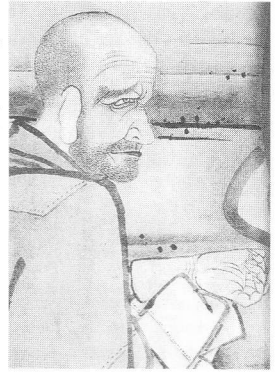
其年十二月九日授天大雨堂
光堅立不動道明預賞通勝師問曰汝
久立雪中當求何事光悲淚曰惟願和尚慈
悲開甘露門廣度群品師曰諸佛無上妙道
曠劫難行能行非忍而忍豈以小德小
智輕心慢心欲冀真乘徒勞苦勞聞師語
勵奮取判刀自斷左臂置於師前師知是法
器乃曰諸佛最初求道為法忘身今斷臂
吾前求亦可在師遂回與易曰慧可光曰
諸佛法可得聞乎師曰諸佛法既從久
得先曰我心未寧先師與安師曰將心來與
汝安心竟心了不可得師曰我與汝安心竟
當德後燈錄卷三

雪舟が耳を敢て説明しなかったのは、誰れでも知っている断臂の話を自分自身のこととして表現したかったからではなからうか。

慧可大師は雪舟である。下唇を少し噛み、眼は今、此処(永遠)に着する。切り落した臂はかつての神光そのもの。傷口の朱はいかにも淡い。



慧可断臂図 雪舟筆 (齐年寺蔵)



「慧可断臂图」は雪舟七七歳、

明応五年（一四九六）の作とする。七七歳にしてこの大作を後世の我々に残してくれた。加藤周一氏は「主人公は慧可ではなく面壁のダルマ」とするが、私は主人公は慧可大師である。この画を描く必然は「断臂の祖宗学ぶべし」であり慧可大師は雪舟自身に重なる。島尾新氏は、多くの画師たちが雪舟を規範としながら雪舟らしいところは描けてない、真似できた人はいないとしている。その通りである。

落款の「四明天童第一座」の名誉称号は如何かということもあるが、時代背景として応仁の大乱後の乱世、本朝大画人の自負として受け止めた。 (おわり)

* 「二相慧可大師の耳」(その二) (その二)は『明珠』一九、二二二号に掲載されています。

「大慈宏濟」を目指して

柏市 杉浦上太郎

一昨年の雪印食品事件以来、昨今の中国ダイエツト食品事故、日本ハム不正事件、中国輸入野菜の農薬高濃度残留と、食品問題が雨後の筍のように次々と起こっています。しかし、思い起こしてみますと食品問題は今に始まったことではなく、終戦直後の石鹼を紙に包んで羊羹と称して路上で売る「ニセ羊羹」から始まって、森永砒素入り粉ミルク、多くの缶詰メーカーが鯨肉や馬肉を牛缶として販売した「ニセ牛缶」、三百人が死亡したカネミ油症と、事故の件数は枚挙に暇がありません。

さらに食品産業の一端を担う健康食品業界に焦点を当ててみますと、これも問題が多いのです。健康食品の消費者調査からも、六〇%の人々は満足していない実態が浮かび上がってきます。

それは、食品を扱うに相応しくない業者による不適正商品の製造、ガンやあらゆる病気が治るなどと誇大説明する違法販売業者、密室に消費者を集めて高額商品を押し付ける悪徳業者が横行していることが大きな要因になっています。私のサラリーマン生活は、五年

間の自営期間を除いて三三年にありますが、すべて薬業界でした。

しかし、正確には、ここ四年間は、ドイツのDr. W. シュワーベ製薬という生薬専門の国際企業の日本人に移籍したことにより、食品産業界となりました。それは、生薬は日本では、特定の漢方薬以外は医薬品の認可がされませんので、ドイツ生薬の中から、一部を健康食品にアレンジして製造・販売しているからです。故に健康食品に携わるようになってから、否応なしに食品産業界の不祥事は、重大関心事となり、昨今は忸怩たる思いが高まるばかりです。

しかし、イメージのあまりよくない健康食品業界ですが、新たな展開の時期に入りました。優秀な製品も多く開発され、今後、高血圧・糖尿病・動脈硬化などの「生活習慣病」改善の主役として、医療界での本格活用が促進されます。

それは、既に決定した厚生労働省の第四次医療改革の背景に「生活習慣病」は、適切な指導の下に健康食品を活用して、早期改善を促進する指針が示されたからです。

厚生労働省は、その指導に携わる専門家の養成を、(財)日本健康・栄養食品協会(健康食品産業界の元締め)に依頼し、昨年「食品保

健指導士」制度が発足しました。有資格者が一定の講習を受講し、論文形式の試験に合格して、その資格が得られます。私も、この八月、その第一回目の試験に合格し、その資格を得ました。私が受講し、資格を得ようとした動機は、能力向上をし、少しでも世の中のお役に立ちたいという願いからです。

それは、昨年一二月に行われまして第二回在家得度式で、椎名老師から賜りました「大慈宏濟」の法名に相応しい人間に少しでも近づきたいという熱望でもあります。

私は、本当の健康の基本は、日々の食事と運動と心の持ち様だと思っています。食品摂取の最もよい方法は「居士不二」という東洋医学思想にあるとおり、日々、自分が暮らす近くの土地で取れた旬の野菜を食べることです。

椎名老師は、御自ら汗をかいて、野菜を作られ、それを召し上がっておられますが、健康上、最も理想的なことと存じ上げます。

私は今後、企業人の一員ではありませんが、常に、仏教・社会モラルに思考・行動の原点をおいて諸活動を実践し、微力ながら健康食品産業界、食品産業界を正す火種になりたいと念じております。合掌

『明珠』三六号を読んで

埼玉県大井町 石田 七重

いつもながら、難解な『從容録』の御老師による解説は、後の四分の一くらいからは現在の私たちに結び付けて解説くださり、ホッと安心いたしました。

これによって前の四分の三を振り返って読み直す私です。そして、最後に具体的に何を、どうすれば良いかを考えるきっかけを与えてくださっています。すぐにきっかけを見つけられる時、またそうでない時交ぜ交ぜですが、この終わりの数行に、御老師の温かく厳しい教えが毎号込められているように思います。

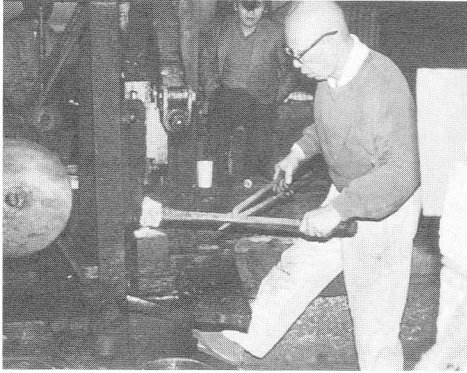
森岡さんにつきましては、先輩皆様方に比べ、長く深いご縁ではありませんが、まっすぐに目を見て、大真面目、大声で話されるご様子が、少年のようでした。

六月頃でしたか、大変蒸し暑い日の坐禅中、私のお隣に坐られていた森岡さんが、大きなうなるような声で「暑い！」と発しました。私は飛び上がりはかりにびっくりました。咳やくしゃみでも困る坐禅中、はつきりと「暑い」とおっしゃった。その声を聞いた私は「暑い」と思ってもいいのだ」と

安心いたしました。

すると随分暑さが楽になりました。そしてお隣の森岡さんの横顔を見て、仏様だと思いました。先ほどの「暑い！」はまさに仏様の御声だったのだと思いました。以後、禅堂にはいつも森岡さんがいらっしやいます。これから蒸し暑い時こそ、私のお隣に坐られているという実感が強いことでしょう。

『明珠』の編集の方のご苦労は、想像し難いことではありますが、交代されての第一号というべき「三六号」を読ませていただきました。ペンを執りたいという思いのまま、浅い内容、拙い文ながら書かせていただきました。合掌



工房で鍛錬する森岡老(昭和61年)

一泊参禅会

- ・ 早朝のおぐらき空を振り仰ぎ
- ・ 暁天坐禅へ心あつむる
- ・ 明け放つ禅堂に渡る初夏の風
- ・ 坐禅する吾の肩を過ぎゆく
- ・ 不如帰鋭き声に鳴き渡る
- ・ 束の間吾は気を削がれたり
- ・ 禅講の始まる合図の折の音
- ・ 澄みたる御堂に響きゆくなり
- ・ 道友との一泊参禅無事に了へ
- ・ 和やかに喫す茶の味甘し

初坐禅体験記

県立柏高校 茶道部

八重樫里永

私たちの生活は「何かを得る」という意識に左右されています。どうすれば自分にとって得か？何が自分にとってためになるのか？などという事です。

坐禅の時、お話しして下さった内容は、「何かのために坐禅をするものではない。」という言葉でした。とはいえ、私たちは茶道で必要な落ち着きを身につけるなどのために坐禅に参加させて頂きました。では私たちのした事は意味がなかったのかというと、そんな事はなかったと思います。

少なくとも、坐禅をしたことで「無功德」という言葉に出会いま

した。言葉だけでなく、初心者の方々に親切に教えて下さった皆さんとも出会えました。これが茶道の心得でもある、「二期一会」というものなのでしょうか。まだ私にそういった深い事は分かりませんが、こういう出会いもいいものだと思います。

大勢で押し掛けていった私たちに親切に教えて下さった龍泉院の皆さん、本当に有り難うございました。今度、坐禅をする時は「無功德」という言葉を念頭に置いてやってみたいと思います。

田口 真美

坐禅をするのは今回が初めての体験でした。静かなところで心を無にするのは難しかったです。ほとんど自然の音しか聞こえなかったため、なんだかか自然と一体感をもてた感じがしました。また機会があったらやってみみたいです。

丸山 香織

今回、私は県立柏高校茶道部員として、こちらで坐禅の体験をさせて頂きました。顧問の先生が、茶道は元をたどると「禅」につながるから、と私達を坐禅講習に連れて行って下さいました。

坐禅は武士の間にひろまった行であり、また茶道も多くの武士が学んだものであります。茶道というものは、今や女性のたしなみとなつていますが、昔は茶室は武士の密談の場としてのものであったそうです。

四畳半が基本の狭いお茶室なので、武士達は狭いなかを詰めあつて正座をしたということです。また、なぜ狭いかというと武士が刀を持つて茶室で振りまわせないと理由もあるそうです。

そして今回、坐禅もまた、武士の強い精神力を養うためのもので、茶道と坐禅は非常につながりが深いのだということがわかりました。どちらも、無駄な動きが一つもなく、緊張した雰囲気のもとで隙を他人に決して見せないもののように思えます。

坐禅を通して、茶道の歴史の奥深さ、多くの日本人が受け継いできたという貴重さ、この二点を私は改めて学ぶことができました。

これからは、このようなことを常日頃思い、私もこのような素晴らしい文化のある国の人間として、精一杯茶道という伝統を、誇りを持って受け継いでいきたいと思ひます。

今回、このような機会を私達に

与えて下さり、誠にありがとうございました。

施食会の功德

柏市 加藤 孝

龍泉院坐禅会員になり六年、毎年施食会には参加させて頂いている。私にとつてはすでに年中行事として定着している。

私の役割は、参道にまで溢れる車の交通整理である。これまでの思い出はひたすら「暑い」ということに尽きていたが、有り難い事に今年は前日までの酷暑が去り、大変涼しかった。

しかし、この日が如何に暑い日であろうとも、毎年この時を心待ちにしている。というのは、椎名老師を始め僧侶の方々と檀家の人達とが一体となつて執り行われる本堂での荘厳な儀式に触れられる

事や、大洞院木村老師の法話を聞かせて頂けるからである。この時は、あたかも、執行者と本堂を埋めつくした檀家の方達が一体化して演じる劇場のような雰囲気さえ感じる。

また更に素晴らしいのは、椎名老師の御指導のもと、参禅会の有志が力を一つにして仕事が出来ることである。この儀式の準備等に参加している会員の方々に感心するのであるが、とりわけ感銘するのは、杉浦さんの手際の良さである。額に玉の汗をしたたらせながら黙々と堂内の飾り付けをする姿には、心頭滅却して仕事に無心で没入する日常禅の真髓を教えられ、禅を修行する者の真骨頂を見せて頂いたような思いがする。

禅を真剣に修行している人は、結果として、卓越した仕事人となるのである。

かくして今年の施食会への奉仕から多くの教えを頂戴した。

これからも健康である限りお手伝いをさせて頂くつもりである。

誠に有り難うございました。合掌



施食会の開始まであと一時間。本堂の飾り付けを終えて、ほっと一息つく

二回楽しんだ

今年の筍掘り

恒例の筍掘りが今年も四月に行われました。

今年には筍掘り史上珍しい事があり、といえますのは筍の発育が殊の外早く、例年の第四日曜の参禅会の後に掘るのでは竹になってしまふのでは、とのご老師の配慮から、急遽第三日曜に変更。晴天の下、鎌を片手に、汗を流しながら土の香、筍の香と春を満喫致し



もう少し掘った方が：

龍泉院参禅会簡介

- 一、日時 毎月第四日曜九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと） 四月は八時半より坐禅作法指導
- 一、坐禅 第一炷 口宣、坐禅三〇分
経行 一〇分
第二炷 坐禅三〇分
- 一、講義 木版三通、開経偈を唱え、椎名宏雄老師より『正法眼蔵』の提唱を聞く。現在「行持」下巻
自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散
- 一、座談 年齢、性別を問わずどなたでも参加できます
- 一、参加資格 無料
- 一、会費 無料
- 一、成道会坐禅 月例参禅会の外に、毎年一二月の第一あるいは第二日曜（本年は一月二日）釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要後、法話を聴聞、点心を共にする
- 一、一泊参禅会 六月上旬、七炷の坐禅とご提唱を聞く

ました。それぞれの家庭で今年もまた龍泉院筍が食卓を飾った事と思います。が、これで終わりではありませんでした。更に第四日曜にも立派な筍がまた頭を出しており、禅会の後掘り起こしました。二度楽しませて頂いた今年の筍掘り、来年は何回？

沼南雑記

参禅会記録（内は座談の司会者
平成一四年

- 四月二日 筍掘り
 - 四月二八日 三一名
（美川 武弘氏）
坐禅・禅講後、筍掘り
 - 五月二六日 三〇名
（中寫 宏誠氏）
 - 六月八・九日
一泊参禅会 二七名
於 天徳山龍泉院
幹事 添田 昌弘氏
松井 隆氏
 - 六月二三日 三三名
（三浦 輝行氏）
 - 七月二八日 三八名
（今泉 章利氏）
 - 八月一六日
「龍泉院施食会」作務奉仕
法話 木村誠治老師
 - 八月二五日 三三名
- 九月二二日 三三名
（加藤 孝氏）
（永野 昭治氏）
- ▼ 当参禅会の筍掘り名人・寺田健二さんより昨年教えを受け、今年……と張り切って参加。しかし今年には運搬係、その成果を発揮できず、来年こそはと筍掘りに闘志を燃やしています。
 - ▼ 暑い暑い七月の禅会に、熱い心を持った高校生が参加。一瞬、会員のボルテージも上がりました。持続しますように。
 - ▼ 今もはつきりと耳に残っている高校の日本史の授業の一コマ。道元の書いた『正法眼蔵』は世界一難解な本です、という先生の声、たった今、椎名老師よりそのご本の講義を受けている。感激、感激。
 - ▼ 今年も曼珠沙華が咲きました。昨年と同じ所に同じ時期に。昨日の朝と同じ時間に起きられない人間もいるというのに……。自然は人間界の先生です。
 - ▼ 皆さんの文章で作られた『明珠』を読む度に、同じ思いを感じる嬉しいひと時。編集に携わって、外に会うことのない読者が沢山いることに気が付いた。一顆明珠の意を心に念じ、全ての読者に思いを馳せて、『明珠』に関わってほしいと思います。（宗房）